

月曜評論

ここ数週間、世界の主要国に相つた政治権力者のドラマチックな失墜ぶりは、国際社会の將來に不吉な陰影を投げかけずにはおかない。

ボンビドー大統領をその死によつて失ったフランスの混迷、カエターノ独裁政権の崩壊をもたらしたホルトルガルの政変については、一応それなりの受け止め方ができるとしても、フランス

首脳は、米中接近に先がけての中加国交樹立にみられるカナタのスマートな外交、世紀の外交といわれた米中首脳会談、ヨーロッパの安定に一時代を画し、東西冷戦時代の最後の終幕を

「東方外交」とみられるよう交は対米離反の自主外交としてこれまで光っていたが、トルドの桶中で失墜していった。ウキ

首脳外交時代の陥せい

しかも、これら三首脳を襲った危機は、共通して内政面にあるとすると、首脳外交時代の

臨弊としての内政について、多くであったことが判明し、ブランド首脳自身にも個人的スキャンダルがとりざたされるという

「首脳は内政面について得点をあげることができず、不信感をた二クソン政権は、いまや「味方」によつても見放されてしま

は得意の社会民主党政権に過ぎない。わしい柔軟な発想によって、国民的支持のもとに東西ドイツ間の平和共存と対、対東欧諸国との現状維持をとりきめた「東方外交」を成功させ、ノーベル

平和賞まで得たのであるが、最近、内政面では大きく行き詰まっていた。あけくのは首脳

「首脳は内政面について得点をあげることができず、不信感をた二クソン政権は、いまや「味方」によつても見放されてしま

緊張緩和という、それ自体は何人も賛同し得る普遍的な目標に

「首脳は内政面について得点をあげることができず、不信感をた二クソン政権は、いまや「味方」によつても見放されてしま

中嶋 嶺雄



「首脳は内政面について得点をあげることができず、不信感をた二クソン政権は、いまや「味方」によつても見放されてしま

(東大助教)